7/17 赤旗

今を生きる子どもたち Ⅱ ⑤

貧困と格差の拡大のなかで

孤立しない社会基盤を

「私は、子ども・若者が、生きづらい社会に適応するすべを身につけてほしくてこの仕事を選んだのではありません。『そのままでいいんだよ』と伝えたいんです」と話すのは、福島県郡山市にあるNPO法人ビーンズふくしまのスタッフ、山下仁子さん。

「誰かがありのままの自分を認めてくれたら、それが生きる力につながるから」と続けます。

ビーンズふくしまは、「子どもの生きる力を引き出し、育てる」を目標に、家庭訪問による支援活動をはじめ、各種の講座やイベント型の活動などを行っています。対象となる家庭を支える関係機関のネットワークの構築に力を注ぎます。

事務所のある郡山市の中心部から、車で1時間ないし1時間半かけて、対象の家庭を定期的に訪問します。現在10家庭15人の子どもが支援の対象になっています。

何回も訪問して

スクールソーシャルワーカーや福祉事務所のケースワーカー、児童相談所などの関係機関から、家庭訪問してほしいと相談が持ち込まれます。すぐに本人に会えるとは限りません。何回も訪問し、子どもとの信頼関係をつくるところから始めます。

「信頼関係がなければ、子どもに声は届かないですからね」と山下さん。部屋に入れてもらえるまで、何度も訪問し、声かけを重ねます。

貧困のなかで夢を失い、リストカットを続ける子ども、貧困のストレスで親からの虐待を受けている子どももいます。学習より医療機関への通院が必要な子どもや、学校に行かないことで自分を守っている子どももいます。地域で孤立している家庭が多く、関係する学校や地域の専門家たちを集め、一つひとつのケースの検討会議を何度も繰り返して、対象家庭の生活を丸ごと支援するチームをつくります。医療関係者や警察の力を借りることもあります。それぞれの視点で意見が違うなど時間がかかることもありますが、「必要なことは丁寧にやる」といいます。（おわり）

ビーンズふくしまのスタッフたち

環境変えていく

山下仁子さんの話　心を込めて向き合うことを大切にしていますが、貧困のなかにいる子どもは心だけではカバーできない。貧困は社会的な問題だからです。子どもたちを取り巻く環境をいかに変えていくかが重要だと感じています。

経済的な貧困が解決されれば家庭全体の抱える課題が解決されるというわけではありません。貧困故に劣悪な家庭環境での生活を強いられている子どもは、生きるエネルギーそのものが低下していて、本来、子どもがもっている学ぶ意欲、知識欲は失われていることが多い。子どもの将来を守るために、地域にない資源はつくることから始めます。

貧困家庭の複合化した問題をひもといていくのは容易なことではありませんが、子どもが希望を失うほど悲しい現実はありません。貧困をその家庭の抱える問題ととらえるのではなく社会全体の問題ととらえ、必要な資源を整備すること、各地域で継続した支援を提供すること、貧困家庭が住み慣れた地域で安心に守られて、孤立しない社会基盤を整備することがとても重要です。